The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	初めてCALL教室を利用して
Author(s)	中, 直一
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2011, 12, p. 51-52
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70324
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

初めてCALL教室を利用して

中 直一（大阪大学 言語文化研究科 言語文化専攻）

私は長らくCALL教室を敬して遠ざけてきた。興味がなかったわけではない。だが、どうにも技術がない。パソコンはなんとか日常的に使用しているが、普段の授業ではずっと黒板とチョークだけを使ってきた。だからCALL教室で学生諸君を前に、あれこれ指示を出しながらコンピューターを駆使する先生方は、私の目には眩しくも神々しく見えた。

神にも似た領域に足を踏み入れよう――そんな無謀なことは考えもしなかった。仮に時間がふんだんに使えるなら、すこしはCALLにチャレンジしたかも知れない。しかし、何よりのネックは、自分の研究室でCALL教室と同じ環境が保持できないということだ。CALL教室に毎日通って教師機の前に陣取り、あれやこれや新しいことにチャレンジすれば、すこしは私にも神々しさが付与されたかも知れない。しかしそんな時間はないし、見知らぬ技能をゼロから習得するだけの気力も、正直言って持ち合わせていなかった。

そんな弱虫の私に力を与えてくれたのは、同じ言語文化研究科フランス語部会の井元秀剛准教授である。2010年の10月のことだが、北海道大学で「国立7大学外国語教育連絡協議会」の「合同シンポジウム」が開催され、阪大からは井元さんがパネリストとして参加された。その時のシンポジウムのテーマは「初修外国語教育とCALL授業」というものであった。私も一聴衆としてこのシンポジウムに出向いたが、様々なパネリストの方々が最新の機器と最新のCALL教材を駆使しての授業実践について報告される中にあって、井元さんの報告は、それまで私が持っていた「CALL授業はこういうもの」というイメージを打ち砕くものであった。もちろん井元さんはCALL教室に詳しい、神にも似た領域に住まう人である。しかし井元さんのCALL教室使用の根本は、私なりの言葉で言うと「CALL教室に特化した教材を使わなくても、CALL教室は使える」というものだ。この考え方が、私に異変をもたらした。

２年生のドイツ語の授業は、私の場合、テキストを学生に読ませてその訳文をチェックするという、きわめて古典的な流儀を墨守してきた。以前は学生に口頭でドイツ語の訳を言わせてきたが、どうも最近の学生諸君は「人に伝える」意志がないのか、うつむいたまま蚊の鳴くような声でモゴモゴ訳文らしきものを口に出して、担当分がおわったら黙り込んで顔を上げさえしない。何を言ったのやら、教師にも周囲の学生にも聞き取れない。そこで数年前から、黒板に訳文を書いてもらい、それを添削しつつ、文法的に重要な事柄を板書して説明する、という授業スタイルを取るようにしてきた。この方法で一定の成果は上がったように思うが、マイナス面がないわけではない。第一私の字は下手である。加えて、板書の際に一瞬漢字を忘れることがある。いったん「この字で良かったか？」と考え出すと、正しい字であっても間違っているように思えてしまい、冷や汗が出る。

私は、井元さんのシンポジウム発表に触発されて、「黒板とチョークの代わりにWordを使い、それを学生に見せる」という1点にしぼって、CALL教室を使うことにした。私がCALL教室を使い始めたことを知った同僚諸賢は、みな一様に「えっ！？」と驚き、あるいはニヤニヤしながら私の行く末を案じてくれた。

さて実際の授業だが、学生を4人一組のグループに分け、各自に予習をしてきてもらう。そして授業が始まると、4人がそれぞれの訳文を持ち寄り、相談の上、グループとしての統一訳を作ってもらう。授業開始と同時に教師が語り出すのではなく、授業開始から約30分は「相談タイム」になるわけである。私の狙いは、相談の過程で相互に教え合い、知

恵を出し合い、そして色々意見を出し合う過程で、忘れかけていた文法事項を思い出したり、あるいは、自分の訳文が他人に通じるのかどうかを身をもって体験してもらう、ということである。いにしえの適塾で行われていた「会読」の流儀を、多少のアレンジを施した上で現代に復活したものである。そしてこの「相談タイム」の間、私とティーチング・アシスタントの大学院生が教室中を廻り、質問に答える。積極的に手を挙げて質問を出してくれるグループもあるが、多くのグループは遠慮してか、教師が接近しても素知らぬ顔をしている。だが私の方から「質問はありませんか？」と声を掛けると、待ってましたとばかりに質問が出る。

各グループで見解がまとまって、「自分たちのグループの訳文はこれだ」というものが出来たら、それを Word 文書にしてもらい、電子メールの添付ファイルにして私と TA さんに送ってもらう。私は教師機の方でそれを受け取り、10 数個あるグループの中から一つを選び、そのグループの Word ファイルを開いて、学生のモニターに映し出す。あとは Word の「コメント」機能を使って、公開添削を行い、補足の説明を書き込む。この間、TA さんには、全グループの訳文をプリントアウトの上、第 1 次のチェックを行ってもらう。授業が終了したら、全グループの訳文を TA さんから受け取り、次回授業までに私の目による第 2 次チェックを行った上で、ABC の評価を付して、次回に各グループに返却する。

4 月以降、この方式で授業を進めてきたが、だんだん時間配分が難しくなってきた。私の授業の流儀に学生諸君が慣れて来るにつれて、皆熱心に質問し、あるいは訳文作りに時間を掛けるようになった結果、「相談タイム」が授業の前半では終了しなくなってきたのである。

そこで 6 月あたりから少し進め方を変更した。授業終了までに各グループの訳文を提出してもらうこととし、次回授業の冒頭で、私が予め選んで添削を終えた 1 つのグループの Word ファイルを学生に見せて、補足解説を行うことにした。その他のグループの訳文は、TA さんが自宅で第 1 次のチェックをし、それを私が次回授業までに受け取って第 2 次チェックを行った上で、やはり ABC 評価を付して、次回授業冒頭に返却する。

このように「CALL 教室を使う」といっても、アナログ 7 割デジタル 3 割の、むしろ旧態依然たる香りのただよう授業形式である。Word と電子メール以外の機能にもチャレンジしたが、ことごとく失敗した。SkyMenu で出席を取る機能を試してみたが、特に朝 1 限などはコンピューターの調子が悪いらしく、実際に出席しているのにコンピューター上では出席になっていない学生が続出して、それ以来出欠は TA さんに目視で確認してもらうことにした。あるいは、授業中学生が関係のないインターネットページを見ていないか、教師機の方で確認しようとして SkyMenu の操作を誤り、それまで学生のモニターに写っていた添削画面が消えてしまったこともある。

そんなこんなの珍道中だが、今の私に言えることは、「自分のパソコンで使える機能だけを使うのであれば、素人でも CALL 教室は使える」ということだ。「使いこなせる」という段階まではまだまだ遠い。しかし私は CALL 教室を 1 セメスターの間なんとか使い終えて、ひとり文明開化をことほぎつつ祝杯をあげている。